

令和6年度 第2回 佐倉市立美術館運営協議会

議事録

日 時：令和7（2025）年3月22日（土） 14：00～17：00

場 所：佐倉市立美術館 4階ホール

出席者：以下のとおり

（委 員 9名）

安達委員、葛西委員、齊藤委員、豊田委員、中松委員、長澤委員、樋田委員、安本委員

（職 員 6名）

平野館長、本橋副主幹（学芸員）、木邨主査（学芸員）、
永山主査（学芸員）、西川主任主事（学芸員）

会議次第

1. 開 会
2. あいさつ
3. 報告事項
 - （1）令和6年度事業報告について（公開）
 - （2）令和7年度事業計画について（公開）
4. 協議事項
 - （1）作品の購入について（非公開）
5. その他
6. 閉 会

【１．開会】

【２．あいさつ】

<館長よりあいさつ>

【３．報告事項】

（１）令和６年度事業報告について

<事務局より説明>

（会長）

開催中の香取秀真展について、これが何故話題を呼ばないのか、これからの佐倉市立美術館の展覧会全体にもつながっていることなので、発言をいただければと思います。

（事務局）

来場者は巡回展の半分にも達しない。地に足の着いた研究に基づく企画展は美術館の存在意義としてやっていくべきですが、集客に結びつかない。見せ方の工夫ができなかったことは反省しています。広告費もない中、SNSなどもやっていますが、若者へのアピールにつながっていない。来たお客様からは高い評価をいただいているのですが。

（会長）

これからも地域を代表する作家は大切にしていけるべきだからこそ、見せ方が重要になってくる。従来の香取像を壊すようなことをするのは難しいのですか。

（事務局）

壊す以前にイメージがない、知られていないのが現状です。

（会長）

高校をまわって講演をするとか。知ってもらおう努力が必要ではないですか。

（事務局）

佐倉高校のOB会では講演しましたが、現役の高校生はあまり参加していませんでした。近代工芸のビッグネームと言っても、美術の中の工芸の中の近代という、そもそもが狭い世界です。

（会長）

千葉県立美術館では、浅井忠を、日本に洋画を取り入れた功労者という従来のイメージではなく、自分の足で歩いて時代を生きたイメージを前面に出した展覧会がありました、反対意見などはなかったのですか。

（委員）

館の５０周年を総括し、次の５０年に向けてどういう展開をしていくのか、というところで、やっぱり浅井忠をとりあげることにしたのですが、近代洋画の先覚者ではもはや新鮮味がない。美術関係者は知っているけれども、浅井忠について何も知

らない、ゼロの状態から検討を重ねてできたのが「あちこちに行く」というイメージでした。広報手段としては、浅井忠の亚克力スタンドを100体つくって配り、「あちこち」で写真を撮ってSNSにあげてもらいました。

(事務局)

香取展でも人となりを見せようと、芥川龍之介の言葉を使ったり、土門拳の撮った本人の写真を載せたりしましたが、あまり伝わらなかったようです。

(副会長)

新しい見せ方として、アジアは一つという岡倉天心のイメージの上に香取の考え方があるのではないかと。シルクロードを通して、インド、中国など、アジア文明が混ざり合って日本で一つになった、そんなことを挑戦的な言葉で副題にしてもよかったかもしれません。あと、東京都美術館の収蔵品が出ているので、今、ミロ展でものすごいお客さんが来ている東京都美術館にもチラシを置いてもらうとか、佐倉でこういうのが出ていますよという紹介をしてもらうとか。

(事務局)

はい。リツイートしてもらって、SNSが急に伸びたりもしました。

(副会長)

まだまだやれることはあるのでは。

(会長)

15年後、20年後の香取展のために考えてみてください。

(2) 令和7年度事業計画について(資料6～7頁)

<事務局より説明>

(会長)

前回の予定から、一つ企画展がなくなったということですが、いかがでしょうか。代わりにやることになった収蔵作品展はどれですか。

(事務局)

宮内優里展が金額的に難しくなり、他の買取展などを検討しましたが、予算が通らず、2本目の収蔵作品展が代わりに入った形です。

(副会長)

「工芸」と「彫刻」のあいだ、というのは大きなテーマですね。

(事務局)

これから審議していただく和田的作品は工芸とされていますが、本当にそうなのか、彫刻、置物、人形などどう区別しているのか、自分の疑問を収蔵作品の範囲の中でお客様に投げかけてみたいと考えています。

(委員)

香取秀真展にも言えることですが、今の生活の中で見たことのないものを、次から次と見せられても一般の方には理解し難い。研究活動としてはよいし、専門の問題

意識を深めていくのは大切ですが、それをそのまま展示という形で見せるのはどうか。やり方をもう少し検討してもよいのではないかと思います。

（事務局）

香取展については、ボリュームでそのすごさを見せようとしたところがあります。

（委員）

「工芸」という前提がわからないので、ボリュームと詳細な解説でそのすごさを見せようとしても、伝わらない。展示は展示で、詳細な解説や研究成果はサイトで見せるということもできる。企画展でやって、また収蔵展でこうしたテーマを扱うのは、一般の方との距離感が生まれてしまうと思います。

（会長）

お客様とこの美術館との間に距離ができてしまうということかと思いますが、市民でもある委員の方々はいかがですか。

（委員）

個人的には興味があります。作る側としても、工芸は「用の美」とか素材について言われたりしますが、公募展でも工芸ではなく、彫刻として出したらどうか、といった話も出ます。ただ、どっちだっていいでしょう、と思っている人には理解できないかもしれません。

（委員）

絵画というか平面でも、最近デジタル版画なども出てきて、区別がつかない状態です。香取秀真展も見せていただき、ほとんどは工芸作品ととらえていましたが、例えば日本橋の装飾は彫刻のような気がするし、大きさなのかどうか。彫刻と工芸とどちらが上かなどという捉え方はしなくてよいようにも思いますが。

（会長）

お話を聞いて学ぶことが多い。言ってみれば行政が美術の分野に秩序を与えていて、はっきりしているほうがわかりやすいのですが、わかりやすいから面白いとは限らない。

（委員）

専門ではない方にもわかるように説明してくださればよいと思います。気が付けば面白いと感じます。

（委員）

一般の方はそれぞれイメージを持っているが、美術館としては工芸、彫刻についてこう捉えている、当然のことながらその間で重なってくる部分がある、ということかと思います。前提をわかりやすく説明できれば結構面白いのかなと思います。昨年は中学生の美術館訪問がゼロとなっていますが、夏休み前に学校連携などもできればよいと思います。

（会長）

底流としてはみなさん疑問を持っている。概念を問おうとすると抽象的でわかりづらくなるので、作品を絞って具体的にこの作品にこんな両方の要素がある、という

話ならわかりやすいかもしれません。他にはいかがですか。

（委員）

「佐倉・房総ゆかりの作家たち」という中には書道の方もいますので、検討してみてください。

（委員）

「ねこさがし いぬさがし」はとっつきやすいテーマ。松山庭園美術館では猫の作品を公募して毎年展覧会をやっている。一般の人が参加できる企画もあるともっと集客できるのでは。

（会長）

3月29日からですので、もう決まっていると思いますが、次回あった時には検討してみてください。

企画展がひとつできなくなったということですが、他の展覧会は予算を削られたりはしていないのですか。

（事務局）

それはありません。宮内優里展も引き続き実現に向けて打ち合わせを続けています。

（以降非公開）